

# 長崎県中北部本土方言の動詞テ形における形態音韻現象

有元光彦

Morphophonological Phenomenon of the *Te*-form Verbs  
in the Central and Northern Mainland Dialects of Nagasaki Prefecture

Mitsuhiko ARIMOTO

(Received September 28, 2007)

## 0. はじめに<sup>1</sup>

本稿の目的は、長崎県中北部本土方言を対象とし、動詞テ形のデータを挙げるとともに、そこに起こる特異な形態音韻現象を記述することにある。

この特異な形態音韻現象とは、有元光彦(2007a,b,c)等と言うところの「テ形(音韻)現象」である。有元光彦(2007c)によると、テ形現象は次のように定義されている。

### (1) テ形(音韻)現象:

動詞テ形において、共通語の「テ」「デ」に相当する部分が、動詞の種類(語幹末分節音の違い)によって、様々な音声で現れる形態音韻現象。

例えば、ある方言△において、<書いてきた>を[kakkita]というように、共通語の「テ」に相当する部分にいわゆる促音が現れるとする。一方、<取ってきた>は\*[tokkita]とは言えず、[tottekita]という[te]が現れる形しか存在しないとする。このように分布に偏りがある場合、方言△はテ形現象を持つと言う。

テ形現象は形態音韻現象の総称であるので、様々な下位タイプが存在する。大きく言って、「真性テ形現象」「非テ形現象」「全体性テ形現象」「擬似テ形現象」の4タイプに分けられる。

本稿では、長崎県中北部本土諸方言にも周辺地域と同様にテ形現象が存在するかどうか、存在するとしたらどのタイプを示すか、さらにこのタイプが周辺地域のテ形現象のタイプとどのような関連性があるか、について分析する。

## 1. 方法論

本稿では、初期の生成音韻論(Generative Phonology)の枠組みを利用する。この枠組みでは、基底形(underlying form)に音韻ルール(phonological rule)が線的(linear)に適用されることによって、音声形(phonetic form)が派生される。<sup>2</sup> 基底形は、心内辞書

1 本稿の一部は、平成16~18年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究(C)(2)「九州方言における音便現象とテ形現象の“棲み分け”に関する研究」(研究代表者:有元光彦・No.16520281)、及び平成19年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・萌芽研究「方言研究における構成的アプローチの構築」(研究代表者:有元光彦・No.19652041)によるものである。フィールドワークにおいては、平戸市・西海市崎戸地区・長崎市外海地区・東彼杵町の各教育委員会(教育センター)に大変お世話になった。記して感謝する次第である。

2 以下、基底形は記号/ /で、音声形は記号[ ]でそれぞれ括る。

(mental lexicon) に登録されている辞書項目 (lexical item) が形態的操作によって組み合わされたものである。従って、活用形の1つであるテ形の語構成 (基底形) は、「動詞語幹+テ形接辞」となっている。

動詞語幹には次のようなものがある。

(2) a. 子音語幹動詞：

/kaw/<買う>, /tob/<飛ぶ>, /jom/<読む>, /kas/<貸す>, /kak/<書く>, /kog/<漕ぐ>, /tor/<取る>, /kat/<勝つ>, /sin/<死ぬ>など

b. 母音語幹動詞：

/mi/<見る>, /oki/<起きる>, /de/<出る>, /uke/<受ける>など

c. 不規則語幹動詞：

/i/~/itate/<行く>, /ki/<来る>, /s/<する>

ここでは、テ形に使われる語幹のみを挙げている。子音語幹動詞・母音語幹動詞の各語幹は他の活用形でも共通して使われるが、語幹を複数持つ不規則語幹動詞では活用形によって異なる語幹が使用される。

テ形接辞は、本稿で扱う方言においてはすべて/te/である。テ形接辞の直後には、様々な単語が続く。例えば、[kita]<(～て)きた>, [minno]<(～て)みる>, [miro]<(～て)みる>, [kurejka]<(～て)くれないか>等である。

## 2. データ属性

本稿で挙げたデータは、平成18 (2006) 年10月にフィールドワークによって収集されたものである。収集した地域は、長崎県平戸市市街地・西海市崎戸町 (旧西彼杵郡崎戸町) 蛎浦地域・長崎市外海地域 (旧西彼杵郡外海町) ・東彼杵郡東彼杵町である。

坂口至 (1998:2) によると、長崎県方言は「中南部本土方言」「北部本土方言」「南部離島方言」「北部離島方言」に大きく分類される。本稿で扱う平戸市方言は北部本土方言に、崎戸町・外海・東彼杵町方言は中南部本土方言にそれぞれ分類されている。中南部本土方言はさらに細かく分類されているが、崎戸町・外海・東彼杵町はいずれも「大村・彼杵方言」に属している。

データは音声記号によって表記する。データの適格性については、各音声形の直前に以下のような記号を付けて示す。即ち、記号\*はその音声形が不適格であることを、記号%はその音声形の方をよく使うとインフォーマントが判断していることをそれぞれ表す。

また、本稿では語幹末分節音が $\alpha$ である動詞を「 $\alpha$ 語幹動詞」と呼ぶ。例えば、語幹末分節音が/k/である動詞、/kak/<書く>はk語幹動詞である。

## 3. 分 析

本節では、各方言のデータを挙げつつ、テ形現象のタイプを考察していく。

本節で挙げるデータ表では、方言形のみを音声記号で表記する。初出の語幹がある場合には、その都度注で説明する。

### 3. 1. 平戸市方言

本節では、平戸市方言のテ形現象を観察する。動詞テ形のデータを【表1】に挙げる。

【表1】平戸市方言の動詞テ形

語幹	テ形	意味
kaw<買う>	ko:tekita *ko:fikita *kokkita	買ってきた
tob<飛ぶ>	to:dekita	飛んできた
jom<読む>	jo:dekita	読んできた
kas<貸す>	kja:tekita	貸してきた
kak<書く>	kja:tekita	書いてきた
kog<漕ぐ>	ke:dekita oe:dekita <sup>3</sup>	漕いできた
tor<取る>	tottekita	取ってきた
kat<勝つ>	katttekita	勝ってきた
sin<死ぬ>	ʃindemiro	死んでみる
mi<見る>	mittekita *mittekita *mikkita	見てきた
oki<起きる>	okitekita *okittekita *okifikita	起きてきた
de<出る>	detekita *dettekita	出てきた
uke<受ける>	uketekita *ukettekita *ukefikita	受けてきた
i<行く>	itekita	行ってきた
ki<来る>	kitemiro *kitemiro	来てみる
s<する>	ʃitekita *ʃittekita *setekita	してきた

【表1】において、\*[kokkita]<買ってきた>、\*[mikkita]<見てきた>が不適格であることから、平戸市方言には有元光彦（2007a）で言うところの真性テ形現象は見られない。また、\*[ko:fikita]<買ってきた>、\*[okifikita]<起きてきた>、\*[ukefikita]<受けてきた>が不適格であることから、擬似テ形現象も見られないということが分かる。従って、平戸市方言は非テ形現象方言であることになる。有元光彦（2006,2007a）によると、近隣の島原半島方言は擬似テ形現象方言であるので、平戸市方言のような北部本土方言は、島原半島方言のような中南部本土方言（島原・南高方言）とはテ形現象において全く異なるタイプであると言える。

3 <泳いできた>の意味。語幹は/oeg/<泳ぐ>である。

## 3. 2. 西海市崎戸町方言

本節では、崎戸町方言のテ形現象について記述する。動詞テ形のデータを【表2】に挙げる。

【表2】崎戸町方言の動詞テ形

語幹	テ形	意味
kaw<買う>	ko:tekita *ko:ʃikita *kokkita	買って来た
tob<飛ぶ>	tondekita *to:dekita *to:ʃikita *toŋkita	飛んできた
jom<読む>	jondekita *jo:dekita	読んで来た
kas<貸す>	kaʃitekita *kja:tekita *ke:tekita	貸して来た
kak<書く>	kaitekita *ke:tekita	書いて来た
kog<漕ぐ>	koidekita ke:dekita <sup>4</sup> ojoidekita <sup>5</sup> *oe:dekita	漕いできた
tor<取る>	tottekita	取って来た
kat<勝つ>	kattekita	勝って来た
sin<死ぬ>	ʃindemiro	死んでみる
mi<見る>	mittekita *mittekita *mikkita	見て来た
oki<起きる>	okitekita *okittekita *okikkita	起きて来た
de<出る>	detekita *dettekita *dekkita	出て来た
uke<受ける>	uketekita *ukettekita *ukekkita	受けて来た
i~it<行く>	itekita ittekita *ikkita	行って来た
ki<来る>	kitemiŋka	来てみないか
s<する>	ʃitekita *setekita	して来た

4 インフォーマントより上の世代(90歳代以上)が使っていたとのことである。

5 <泳いできた>の意味。語幹は/ojog/<泳ぐ>である。

【表2】から分かるように、共通語の「テ」に相当する部分に現れる音声は[te],[de]だけである。従って、崎戸町方言は非テ形現象方言ということになる。

注意したいのはテ形現象に関してだけではなく、平戸市方言に見られていたウ音便（長音便）がほとんど存在しないという点である。確かに、[ko:tekita]<買って来た>にはウ音便が見られるが、\*[to:dekita]<飛んできた>、\*[jo:dekita]<読んで来た>などは不適格である。\*[ke:dekita]<漕いで来た>の脚注によると、90歳代以上で使用することであるので、インフォーマントの世代（80歳代）以下では消滅しているのかもしれない。インフォーマントの話によると、崎戸町は炭鉱の町であったため様々な地域から多くの人が集まってきていたようである。それによって一種の共通語化が進行したということも、世代差とは別の要因として考えられるかもしれない。

### 3.3. 長崎市外海地域方言

本節では、長崎市外海地域方言のテ形現象を記述する。動詞テ形のデータを【表3】に挙げる。

【表3】外海地域方言の動詞テ形

語幹	80歳代女性	60歳代男性	意味
kaw<買う>	ko:tekita *ko:ʃikita <sup>6</sup> *kokkita	ko:tekita *ko:ʃikita *kokkita	買って来た
tob<飛ぶ>	tondekita tsu:dekita *to:dekita	tondekita tsu:dekita <sup>7</sup> to:dekita	飛んできた
jom<読む>	ju:dekita jo:dekita	jo:dekita	読んで来た
kas<貸す>	kja:tekita ke:tekita kaʃitekita	kja:tekita <sup>8</sup> ke:tekita kaʃitekita	貸して来た
kak<書く>	kja:tekita	ke:tekita	書いて来た
kog<漕ぐ>	ke:dekita	ke:dekita	漕いで来た
tor<取る>	tottekita	tottekita	取って来た
kat<勝つ>	kattekita	kattekita	勝って来た
sin<死ぬ>	ʃindekureŋka	ʃindemiro <sup>9</sup>	死んでくれないか
mi<見る>	mittekita *mittekita *mikkita	mittekita *mittekita	見て来た
oki<起きる>	okitekita *okittekita	okitekita *okittekita	起きて来た
de<出る>	detekita *dettekita	detekita *dettekita *dekkita	出て来た

6 インフォーマントより上の世代（90歳代以上）は使っていたとのことである。

7 インフォーマントより上の世代（80歳代以上）が使っていたとのことである。

8 インフォーマントより上の世代（80歳代以上）が使っていたとのことである。

9 <死んでみる>の意味。

uke<受ける>	uketekita *ukettekita	uketekita *ukettekita	受けてきた
itate<行く>	itatekita	itatekita	行ってきた
ki<来る>	kitemiro	kitemijka	来てみる
s<する>	ʃitekita *setekita	ʃitekita *setekita	してきた

【表3】から分かるように、共通語の「テ」に相当する部分には[te],[de]しか現れていないので、外海地域方言は非テ形現象方言である。[ʃi]が現れる形は、[ko:ʃikita]<買ってきた>が90歳代以上で使われるとのインフォーマント情報から、擬似テ形現象的な要素が廃れてしまっているのかもしれない。ただ、80歳代のインフォーマントによると、[ʃi]は大野・大中尾で聞くことがあるとのことである。ひょっとしたら、地域差があるのかもしれない。

音便に関しては世代差が見られる。例えば、/tob/<飛ぶ>では[to:dekita]より[tsu:dekita]の方が古い形のようなのである。/jom/<読む>では[jo:dekita]より[ju:dekita]の方が古いであろう。/kas/<貸す>では[ke:tekita]より[kja:tekita]が古いだらう。/kak/<書く>の場合も、80歳代のインフォーマントが[kja:tekita]、60歳代のインフォーマントが[ke:tekita]をそれぞれ使っているなので、後者よりも前者が古いであろう。以上、関連する他の動詞の場合も含めてまとめると、次のようになる。<sup>10</sup>

- (3) a. /kaw/<買う> : aw→oo  
 b. /tob/<飛ぶ> : ob→uu > ob→oo  
 c. /jom/<読む> : om→uu > om→oo
- (4) a. /kas/<貸す> : as→(ai)→jaa > as→(ai)→ee  
 b. /kak/<書く> : ak→(ai)→jaa > ak→(ai)→ee  
 c. /kog/<漕ぐ> : og→(oi)→ee

(3), (4)から分かるように、(3b,c)のように語幹末分節音[-syl, +lab]の直前の母音が[o]である場合、及び(4a,b)のように語幹末分節音[-syl, -cor, -lab]の直前の母音が[a]である場合に、世代差が見られるようである。<sup>11</sup>しかも、(3b)と(3c)、(4a)と(4b)がそれぞれ同じパターンを示している。そして、新しい世代になると、(3), (4)のそれぞれが同じアウトプットになっている。即ち、(3)ではすべて/oo/、(4)ではすべて/ee/という中高母音になっている。

### 3. 4. 東彼杵町方言

本節では、東彼杵町（蔵本郷・駄地郷<sup>だじ</sup>）方言のテ形現象について記述する。【表4】に動詞テ形のデータを挙げる。

10 記号>は、その左側の交替の方が右側の交替よりも古いことを表す。

11 弁別素性 (distinctive feature) は、[syl(labic)]が音節主音性、[cor(onal)]が舌頂性、[lab(ial)]が唇音性をそれぞれ表す。

【表 4】 東彼杵町方言の動詞テ形

語幹	蔵本郷	駄地郷	意味
kaw<買う>	ko:tekita *ko:ʃikita *kokkita	ko:tekita *ko:ʃikita *kokkita	買ってきた
tob<飛ぶ>	to:deikijo <sup>12</sup>	tondekita to:dekita	飛んできた
jom<読む>	jondekita jo:dekita	jondekita jo:dekita	読んできた
kas<貸す>	kaʃitekita kja:tekita	kaʃitekita kja:tekita <sup>13</sup> ke:tekita	貸してきた
kak<書く>	kja:tekita	kja:tekita <sup>14</sup> ke:tekita	書いてきた
kog<漕ぐ>	koidekita *ke:dekita oe:dekita <sup>15</sup>	koidekita ke:dekita kja:dekita <sup>16</sup> oe:dekita <sup>17</sup>	漕いできた
tor<取る>	tottekita	tottekita	取ってきた
kat<勝つ>	kattekita	kattekita	勝ってきた
sin<死ぬ>	ʃindemiro	ʃindemiro	死んでみる
mi<見る>	mittekita *mittekita *mikkita	mittekita *mittekita *mikkita	見てきた
oki<起きる>	okitekita *okittekita	okitekita *okittekita *okikkita	起きてきた
de<出る>	detekita *dettekita	detekita *dettekita dekkita <sup>18</sup>	出てきた
uke<受ける>	uketekita *ukettekita *ukekkita	uketekita *ukettekita ukekkita	受けてきた
i~it~itate<行く>	itekita ittekita itatekita	itekita ittekita itatekita	行ってきた
ki<来る>	kiteminno	kitemiro	来てみる
s<する>	ʃitekita *setekita	ʃitekita *setekita	してきた

12 <飛んで行っている>の意味。

13 彼杵宿地域で聞かれるとのことである。

14 インフォーマントの子どもの世代（50歳代程度）が使用するとのことである。

15 <泳いできた>の意味。語幹は/oeg/<泳ぐ>である。

16 千綿宿地域で聞かれるとのことである。

17 <泳いできた>の意味。語幹は/oeg/<泳ぐ>である。

18 インフォーマントの子どもの世代（50歳代程度）が比較的よく使用するとのことである。

【表4】から分かるように、東彼杵町方言には地域差がある。まず、蔵本郷方言では、共通語の「テ」に相当する部分に[te],[de]しか現れていないため、非テ形現象方言であると言える。一方、駄地郷方言では、[dekkita]<出てきた>、[ukekkita]<受けてきた>にいわゆる促音が現れているので、真性テ形現象方言である。より細かくは、有元光彦(2007b,c)で言うところの「タイプTG方言」である。<sup>19</sup> 即ち、語幹末分節音が/e/であるときに、次のようなルールが適用されると仮定できる。

(5) e消去ルール：

語幹末分節音が X でないとき、テ形接辞/te/の/e/を消去せよ。

X=[-syl]

X=[-syl]とすると、i語幹動詞にも(5)が適用されるように見えるが、i語幹動詞の語幹末分節音は、/i/ではなく/r/になりつつあるようである。次の母音語幹動詞の否定形を挙げた【表5】を見られたい。

【表5】母音語幹動詞の否定形（駄地郷方言）

語幹	否定形
mi<見る>	mi <sub>N</sub> %miran
oki<起きる>	%oki <sub>N</sub> okiran
de<出る>	%de <sub>N</sub> deran
uke<受ける>	uke <sub>N</sub> *ukeran

【表5】から分かるように、i語幹動詞ではある程度r語幹化（ラ行五段化）が起こっているが、e語幹動詞ではそれが起こっていないのである。従って、<見る>、<起きる>の語幹が/mi/、/oki/ではなく、それぞれ/mir/、/okir/であるとすると、ルール(5)の適用は受けないということになる。

よって、/uke/<受ける>のテ形の派生過程は次のようになる。

(6) /uke/<受ける>のテ形の派生過程：

/ uke + te # ki + ta /      基底形  
 / uke + t # ki + ta /      e消去ルール  
 / uke + k # ki + ta /      逆行同化ルール  
 [ ukekkita ]                  音声形

地理的に、蔵本郷は東彼杵町の中部に、駄地郷は南部にあるので、それが地域差に反映され

19 有元光彦(2007a)では「タイプG方言」という名称を使用していたが、より分かりやすくするために「タイプTG方言」という名称に変更した。「タイプTG方言」の「T」は真性テ形現象方言を表す。

ているのかもしれない。しかし、東彼杵町の南に隣接する大村市、及びその南に位置する諫早市などは現時点で調査できていないので、テ形現象に関しては不明である。諫早市の南東に位置する島原半島に入ると、全体的に擬似テ形現象地帯となることから (cf. 有元光彦 (2006, 2007a))、非テ形現象化 (真性テ形現象の“崩壊”) が進行しつつあるのかもしれない。

#### 4. 比 較

本節では、本稿で扱った諸方言のテ形現象を比較する。まず、共通語の「テ」「デ」に相当する部分に現れる音声を【表6】にまとめる。<sup>20</sup>

【表6】共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声の比較

語幹	平戸市・崎戸町・ 外海地域・ 東彼杵町 (蔵本郷)	東彼杵町 (駄地郷)
kaw<買う>	te	te
tob<飛ぶ>	de	de
jom<読む>	de	de
kas<貸す>	te	te
kak<書く>	te	te
kog<漕ぐ>	de	de
tor<取る>	te	te
kat<勝つ>	te	te
sin<死ぬ>	de	de
mi<見る>	te	te
oki<起きる>	te	te
de<出る>	te	te/Q
uke<受ける>	te	Q
i~it~itate<行く>	te	te
ki<来る>	te	te
s<する>	te	te

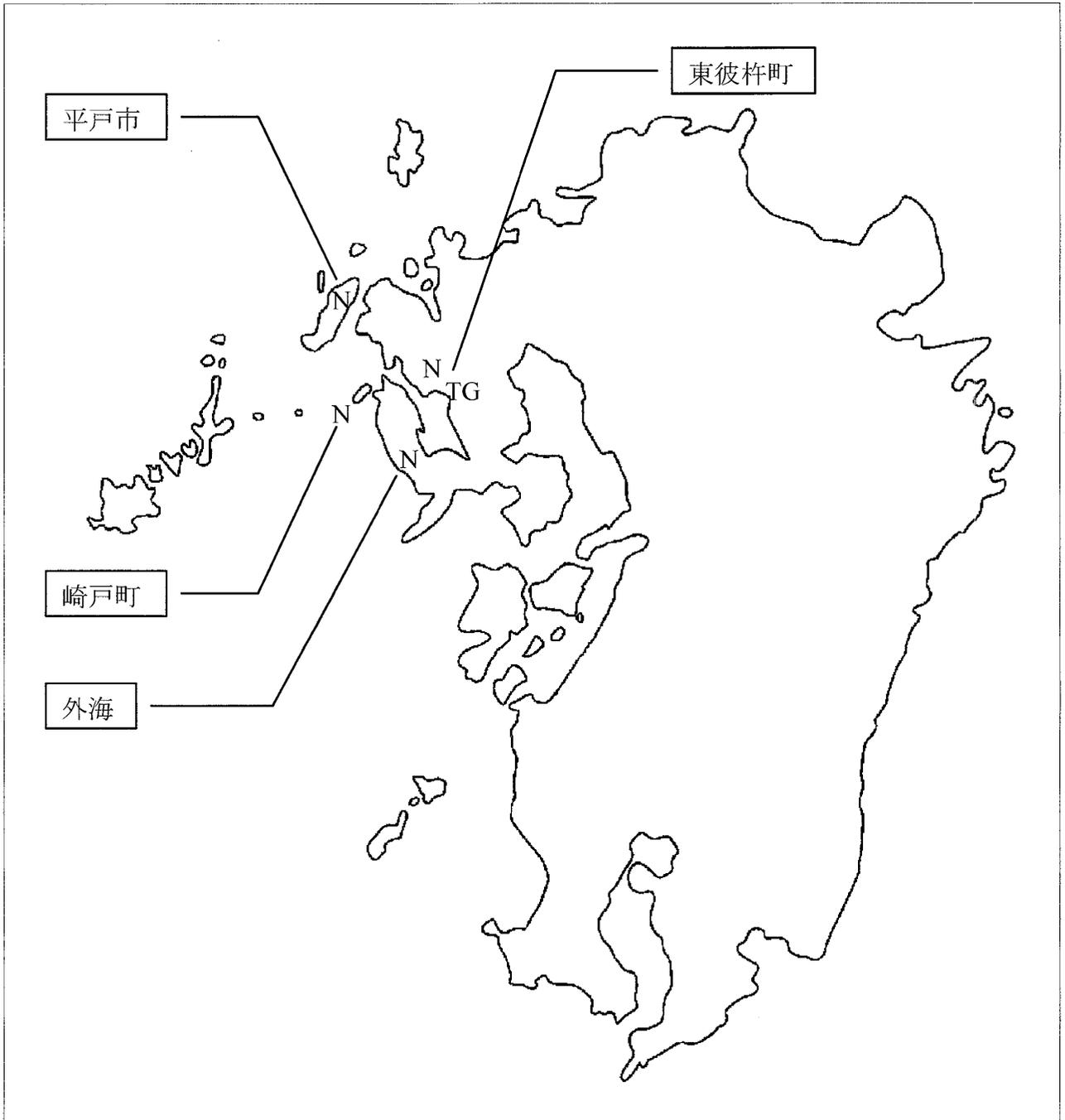
【表6】にまとめたように、東彼杵町 (駄地郷) 方言だけが真性テ形現象方言 (タイプ TG 方言) であり、その他の方言はすべて非テ形現象方言である。

#### 5. 共時的 (地理的) 考察

本節では、共時的な考察、特に地理的な問題について議論する。

本稿で取り上げた諸方言のテ形現象タイプの分布を示すと、【図1】のようになる。記号 N は非テ形現象方言を表す。

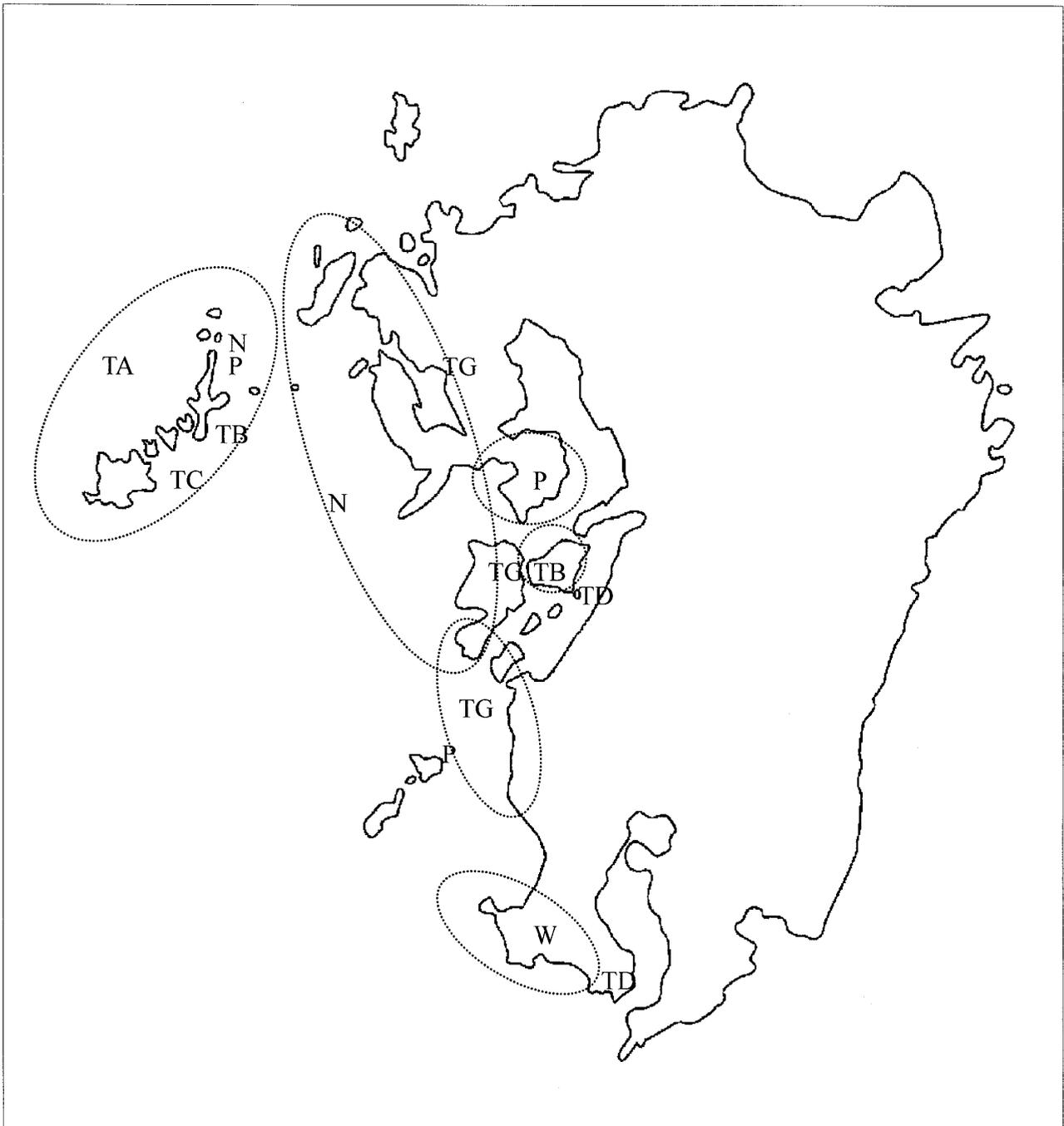
20 記号 Q はいわゆる促音を表す。



【図1】 長崎県中北部本土方言のテ形現象の分布

【図1】から予測できることは、長崎県中北部本土方言のほとんどが非テ形現象方言であろうということである。従って、真性テ形現象方言は、東彼杵町（駄地郷）以南に存在する可能性が高い。しかし、以南とは言っても、西方の長崎市方言は非テ形現象方言である（cf. 塚本明廣（1978））。真性テ形現象が見られる可能性は東方にあるが、島原半島方言が擬似テ形現象方言であるので、それよりも北側、即ち諫早市近隣に限られることになる。今後の調査に期する。

次に、テ形現象タイプの地理的分布を九州西部全体から鳥瞰すると、どのようになっているであろうか。鳥瞰図を【図2】に挙げる。



【図2】 九州西部方言のテ形現象の分布（鳥瞰図）

【図2】は、有元光彦（2007a）に本稿での結果を加えたものである。調査不足によって不明な地域も多々あるが、おおよそ長崎県五島列島はタイプTA方言、島原半島は擬似テ形現象方言（P）、熊本県天草上島などはタイプTB方言、天草下島南部から南へはタイプTG方言、鹿児島県薩摩半島は全体性テ形現象方言（W）という分布になっている。

問題は、本稿で扱った地域も含めて、長崎県本土及び熊本県天草下島西部を占める非テ形現象方言（N）である。<sup>21</sup> 地理的には、長崎市近辺を中心に南北に広い勢力を保っていることが分かる。

21 もちろん、【図2】において、非テ形現象方言（N）の領域は点線の範囲だけではない。【図2】では九州西部だけが対象となっているため、そのような括り方になっているだけである。実際、何も表記していない地域の大部分は非テ形現象方言である可能性が高い。

## 6. 通時的考察

本節では、前節の地理的な考察を踏まえた上で、通時的な問題を議論する。

まず、【図2】を見ると、「非テ形現象方言には必ずタイプ TG 方言が地理的に隣接している」ということが観察される。これは他の地域でも見られる。例えば、熊本県天草下島の西部には非テ形現象方言がかなりまとまって分布するが、その東側に隣接する五和町井手方言はタイプ TG 方言である。また、天草下島西部の南側に隣接する天草市牛深町（旧牛深市）、及び鹿児島県の出水郡長島町下山門野、薩摩川内市（旧川内市）中心部方言もタイプ TG 方言である。

有元光彦（2007a,b）によると、タイプ TG 方言は真性テ形現象の“収斂（収束）点”であり、均衡性（安定性）が最も低い。従って、通時的にそれよりも非テ形現象化（真性テ形現象の崩壊）が進行すると、タイプ TG 方言は非テ形現象方言に行き着いてしまう、ということが仮定されている。このことから考えると、「非テ形現象方言には必ずタイプ TG 方言が地理的に隣接している」ということは、そこでまさに非テ形現象化が起こっていることを示している。

次に問題となることは、その非テ形現象化の進行方向である。長崎県本土中北部における非テ形現象方言と熊本県天草下島西部における非テ形現象方言とは、何か関連があるのであろうか。

もし言語現象以外の要因を求めることが許されるならば、長崎市茂木町にある茂木港と熊本県苓北町にある富岡港、あるいは島原半島南端の口之津港と天草の五和町鬼池港など、橘湾・島原湾・有明海では、古くから海上交易が盛んであったことも一因であるかもしれない（cf. 瀬野精一郎ほか（1998））。このことから、天草下島西部の非テ形現象方言は、長崎県本土中北部のそれが南下したものであると考えられるかもしれない。

また一方で、純粹に言語学的に考えるならば、天草下島西部の非テ形現象方言は、その南側に隣接するタイプ TG 方言に非テ形現象化が起こって生まれたものであり、長崎県本土中北部の非テ形現象方言とは異なる過程（出自）で生まれたものである、という考え方もできる。

結局、非テ形現象方言というものが存在する場合、それが真性テ形現象方言の非テ形現象化によって生まれたものなのか、それともより強い文化圏が持ついわゆる共通語タイプが流入したのか、判断ができないのである。この問題を判断する証拠がタイプ TG 方言の存在であるとすると、非テ形現象方言にタイプ TG 方言が地理的に隣接する場合、その非テ形現象方言は隣接するタイプ TG 方言が非テ形現象化した結果生まれたものである、と言えるのである。

## 7. まとめ

本稿では、長崎県中北部本土方言を対象とし、そこに起こるテ形（音韻）現象を記述した。その結果、大部分の方言が非テ形現象方言であることが判明した。さらに、これらの非テ形現象方言に地理的に隣接する方言として、真性テ形現象方言（タイプ TG 方言）が唯一発見された。この発見によって、「非テ形現象方言には必ずタイプ TG 方言が地理的に隣接している」というルールが仮説として設定できた。これは、真性テ形現象の臨界地域で何が起こっているのか、という問いへの一つの解答でもあろう。

今後は、このルールをさらに検証するためにも、真性テ形現象の臨界地域の精密な調査と記述を進めていく必要があるだろう。

【参照参考文献】

- 有元光彦 (2005a) 「日本語の中の「九州方言」・世界の言語の中の「九州方言」⑤ことばの道一海の道一」『日本語学』 2005年9月号 明治書院 pp.74-82.
- (2005b) 「熊本県天草方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢 (山口大学教育学部)』 第55巻 第1部 pp.1-14.
- (2006) 「長崎県島原半島方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢 (山口大学教育学部)』 第56巻 第1部 pp.47-61.
- (2007a) 『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』 ひつじ書房
- (2007b) 『方言研究の構成的アプローチの試み—九州方言の動詞テ形・タ形における形態音韻現象—』 平成16~18年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究(C)(2)「九州方言における音便現象とテ形現象の“棲み分け”に関する研究」(No.16520281・研究代表者：有元光彦) 研究成果報告書
- (2007c) 「テ形音韻現象に対する構成的アプローチの試み」九州方言研究会・第24回研究発表会 (2007年7月7日) 発表ハンドアウト
- (2007d) 「音韻論・生物学・構成的アプローチ—九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象—」『社会言語科学会・第20回大会発表論文集』 社会言語科学会編 pp.190-193.
- Chomsky, N. & M. Halle (1968) *The Sound Pattern of English*, Harper & Row.
- Kenstowicz, M. (1994) *Phonology in Generative Grammar*, Blackwell Publishers.
- 坂口至 (1998) 『長崎県のことば (日本のことばシリーズ42)』 明治書院
- 瀬野精一郎ほか (1998) 『長崎県の歴史』 山川出版社
- 塚本明廣 (1978) 「長崎市方言の動詞活用表」『文学研究』 75 九州大学文学部編 pp.39-55.